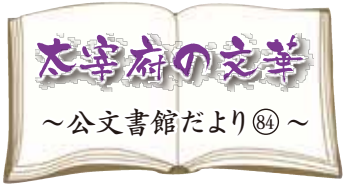
『万葉集』と筑紫

「令和」改元から、まもなく2年になろうとしています。この年号は『万葉集』にみえる大宰帥大伴旅人の邸宅で開かれた「梅花の宴」がその典拠であったことから、太宰府が新元号「令和」ゆかりの地として、全国的に注目を浴びたことは記憶に新しいところです。

『万葉集』は、現存する日本最古の歌集として有名ですが、謎の多い書物でもあります。たとえば、誰が編さんしたのかという点については、大伴家持単独編さん説がある一方、家持がこれに深くかかわったことは間違いないとしても、左大臣にまで昇った橘諸兄（葛城王）が編さん責任者であったという説、あるいは諸兄・家持両者の共撰とする説もあります。また、その成立過程も、かなり複雑であったとみられ、最近の上野誠さんの考察によれば、次のような流れが想定されています。まず、巻1・2が最初に編さんされ、それを引き継ぐ形で巻3・4が、さらにこれに続けて巻5～16が、最後に巻17～20が継ぎ足されて全部で20巻となり、その後、全体が現存する形に調整されて、平城天皇の頃に公にされたというものです。これも確定的とはいえませんが、編さんが何回かに分けて行われたであろうことは、広く認められているところです。



ところで、この『万葉集』には、筑紫（九州全体）に関わる歌がいったいどれくらいあるのでしょうか。林田正男さんは、筑紫で詠まれたもの、作者未詳歌で筑紫の地名が詠みこまれたものを筑紫歌、筑紫の地名が詠みこまれているが、筑紫以外で詠まれたものを参考歌として、筑紫歌322首、参考歌56首、計378首と推定しています。たとえば、

あをによし奈良の都は咲く花の
薫ふがごとく今盛りなり
（巻3　328番）

という歌があります。平城京の繁栄を詠んだ歌ですが、題詞には「大宰少弐小野老朝臣の歌一首」とあり、これに後続する歌群から、大宰府での宴席で詠まれたと考えられており、筑紫の地名は全く登場しないものの、筑紫歌の1首とみることができます。大宰府政庁跡東側の大宰府展示館近くに、この歌を刻んだ歌碑が建てられています。いま流行りのマイクロツーリズムの一つのかたちとして、このコロナ禍のなかで密を避けつつ、市内に散在する万葉歌碑を巡ってみるのもまた一興ではないでしょうか。

～太宰府市公文書館　重松　敏彦～